

今月のテーマ

トッカリ(アザラシ)

村木美幸(アイヌ民族文化財団常勤理事)

アイヌ文化のことをもっとも話したい!
本田優子と村木美幸の二人が、その魅力を交代で
執筆するソノコ(=お便り)形式のエッセイです。

先

日、村上島之允の著した『蝦夷島奇観』の「女
夷の図」で女性の着ているアットウシ(樹皮衣)

の下のアザラシ皮と思われるモウル(女性の肌着)の絵
を見て、博物館の展示等では木綿製のものしか目にし
たことがないので、改めてモウルの語源の「ウル(毛皮)」「
なんだと確認しました。描かれている毛の文様から、フ
モン?ゼニガタ?いやいや、コマ

フか?...とネットのアザラシ画
像と見比べてみましたが、同種
でも文様に個体差がありすぎて
判別は断念しました。

アザラシを「トッカリ」や「トゥ
カラ」といい、カラフト東海岸で
は「カムイ(神)」や「アトウイコロ
カムイ(海神)」、また、猟の際の
沖言葉で氷上にいるのを「イア
ミ」、水中にいるのは「ウォロン
ペ」、海面に顔を出したの「ヘ
タリシ」と呼ぶ他、種や年齢や
成長過程での呼び名などもたくさんあります。

アザラシに多くの呼び名があるのは、それだけ重要で
あったということ、その利用は多岐にわたります。毛皮
は、モウルの他にも防寒用の裾の広がったロング丈のコー
トに帽子、手袋、防水性も高いのでブーツ等がつくられ、
スキーの裏皮にも使われました。皮は丈夫なのでマキリ



イラスト/山丸ケニ

(小刀)の鞘やカチヨ(巫術用太鼓)の張皮、キナ(鋸)等
の狩猟用の縄や犬糧用の手綱、荷縄等の皮紐もつくしま
す。肉や内臓は煮たり焼いたりして食用とし、海が凍る
よくな寒さにも耐えられる分厚い皮下脂肪からは良質
の油が採れることから食用油の他、灯明の油としても使
い、胃袋を使って油を入れる保存容器もつくりました。

北海道周辺に生息するアザラ
シはコマフアザラシとゼニガタア
ザラシ、ワモンアザラシ、クラカケ
アザラシ、アコヒゲアザラシの五
種。ゼニガタアザラシは襟裳岬
から道東沿岸に定着して繁殖を
するので年中見られますが、他
のアザラシは回遊型で、海氷の
上で出産して授乳期間を過ぎすの
で見られる期間は限られます。
中でも、多いのがコマフアザラ
シ。真っ白でフワフワして、ぬいべ
るみのような愛くるしい赤ちゃ

んには誰もが魅了されますが、あの白い毛は一〜三週間
で生え変わるんです。外敵から身を護るのに、氷上
で生活するアザラシは氷や雪と同化しやすい白毛に覆
われて生まれますが、岩場で生活するゼニガタアザラシ
などは胎内で白毛が抜けて、親と同じ毛色で生まれる
といえます。環境で体質が変化することです。ね。



今回のテーマは「スス(ヤナギ)」
本田優子(札幌大学教授)が担当します。



ウポポイ
NATIONAL AINU MUSEUM and PARK
民族共生象徴空間

JR白老駅から徒歩約10分



ウポポイPRキャラクター
「トゥッポボン」

- 本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
- 村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団常勤理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
- 山丸ケニ(やままるけに):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団職員。ウポポイでアイヌ語体験プログラムを担当する。

